

界面の軌跡・滑空する記憶

稲賀繁美

なぜ人は平面という膜のうえに自己の生存の軌跡を投入し、凝縮して描き留めようとするのか。平面には、存在のさまざまな次元が時空を跨いで織り込まれ、堆積し、互いに干渉している。一見深みを捨象したかにみえる皮膚の表面には、実際には多層の世界が、その痕跡を残している。水面は、水の惑星たる地球にとって、もっとも錯綜した深みを孕んだ映写幕だろう。

水は透明な液体だが、その表面で光線は屈曲し、半透明の鏡には上空の気圧という、もうひとつのスクリーンが映し出され、大気圏に存在する物象がその陰翳を投射する。表面張力のおかげで花びらや花粉は水面に浮かび、表面に微妙な屈曲を授けつつ水流に運ばれる。さらに拡大鏡で観察すれば、ときに濁り、とろりとした質感をさえ湛えた水面の物理的相貌が現れる。水影を覗き込むと、水底の物象が透けて見える。だが水深が増すにつれ、水は不意に透明度を失い、視野から逃れる。この光線吸収の特性が、生命の涵養と密接に繋がっていることも、生態学の教えるところだ。

さらに水面とは、そこから水蒸気が大気に舞い上る界面でもあれば、気温が摂氏零下となれば、液体を固体へと変貌させる界面でもある。氷結寸前、摂氏4度以下で膨張するH₂Oの特性ゆえに、水はかならず大気と接する表層から凍結する。もしこの奇妙な物理特性がなければ、地球に生命が孕まれる可能性も著しく阻まれたことだろう。また氷塊が必ず水面から発達するからこそ、その下の不凍層に生命活動の余地が保たれてきた。北極海や南氷洋の豊富な生命がその証となる。

大気圏と水圏との接触面である水面。そこには大気圧の変化が刻々と印を刻む。気温差が風を呼び、水面に波を立てる。大気圧の高低が大洋にうねりを招く。そして地球の衛星である月の引力が、潮の満ち引きの律動を約束する。こうした鼓動の複合のうえに生命圏が成立する。宇宙と地表との交信は水の表面に波紋を投げ、人類はそれに肖って象徴をかたち作ってきた。

人の意識もまた水面のようなものだ。心の深みから届くうねりと、外からの感覚刺激とが水面で交わり描く模様は、気象図のように刻々と変貌し、意識の流れとなって時を刻んでゆく。皮膚はもっとも深い器官—とは、詩人、ポール・ヴァレリーの言葉だったが、心もまた表面に宿る。地球が誕生し、生命が育まれて以来の母なる環境は、生命の胚を包む液体のうちに継承された。哺乳類にあっても、子宮に宿る胎児を包む羊膜を満たす羊水に、太古の海水の記憶が安らっている。この胎内海に接した胚の外胚葉表面が内部へと陥没したところから、脊椎と神経系とが発生する。脳中枢もその延長上にある。外部を織り込んで内部へと取り入れる皮膚の褶曲の襞の膜から、脳髄と意識が誕生する。

内界の湖の水面を見つめ、心象に浮かんで消える泡沫を静かに観照していると、いつしか呼吸が水面の緩やかな反復運動に同期し、淀みや流れに沿って心がときほぐされ、たゆたい始める。濃密でありながら、もはや眺める我を意識しなくなるこの境地にあっては、個々の事象がその日常的な仮象の輪郭を失いはじめ、あたかもそれらを統べる掟のうちに溶け込んだように、無分別な体験に包まれる。森羅万象の生命がそこに浸透し、融通無碍に往来し、互いに感応しあっている。

岡田修二の『水辺』は、モノとココロとが交差してコトとして立ち現れる現場、その交錯の様相をそのまま現前させる。2次元の画面は、深さを欠いているがゆえに無限の深みを宿す。それは潜勢が顕現するための透過性の界面の役割を果たす。琵琶湖湖畔の秘密の水辺で接写された微細な水面の植生を種子として、自然の一駒のうちに宇宙が集約され、名付けられる以前の沈黙の光景が、認知可能な形象を纏って発現する。生命誕生以来の無意識的な記憶も、何層もの透明な絵の具の積層のうちに根をはり、そこに錨を降ろす。あたかも焼き込まれた香のように、それは画面の奥からおもむろに漂ってくる。短くはない制作の時と手間とを経て、それはたまさか、亡霊の面影よろしく、回帰を果たす。グリザイユの淡彩に脱色され、幻のように再来して浮かび上がる転写像は、今や実物の十倍の寸法に成長し、圧倒する偉容をもって、観る者に憑依する。